Publisher's Review
パブリッシャーズ・レビュー
●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●

msz みすず書房の本棚
［無料送付］
No. 33　2019 冬　（表示価格は税別です）
113-0033 東京都文京区本郷2-20-7　tel. 03-3814-0131　www.msz.co.jp

若者が体験した中国の復興現場

――廖惟宇『ゲリラ建築』を読む

五十嵐太郎

本書は、中国の四川大地震（二〇〇八年五月）の後、被災地で復興住宅を建設する謝英俊のプロジェクトにインターンとして参加した台湾の若者が、主に二〇〇八年八月から二〇〇九年一月の出来事を記したドキュメントである。文中において、自分の役割を「前線から随時戦況を知らせる見張り役の歩哨兵のようなものだろうか」や「車の窓を流れる景色は、戦争映画で見る廃墟の町の長回しのシーンのようだった」など、ときどき戦争の比喩が用いられているのが興味深い。実際、被災地は極限の状態にあり、サバイバル的な状況において急いで建設をする現場は戦場と似ていよう。そこで求められるのは、なるべく無駄なものをなくし、徹底的に合理化すること。なるほど、台湾の建築家、謝英俊も限られた要素を用いたゲリラ建築を遂行する。もっとも、日本ではあまり知られていない建築家なので、どのような人物なのかをイメージしやすくするには、阪神・淡路大震災や東日本大震災などの被災地で活躍した坂茂の名前をあげたらよいだろう。実際、謝は台湾中部の九・二一大地震（一九九九年）、台湾南部の水害（二〇〇〇九年）、ネパール地震など、災害が起きると、現地に駆けつけ、再建を手伝う建築家である。

しかし、本書で論じられているように、両者の違いも少なくない。著者の廖惟宇によれば、坂による四川の復興小学校は、部材やジョイントが特注品であるために、「閉ざされたオープンシステム」だという。また、あまりに細かく部材の精度を求めており、コストも安くない。一方、謝のオープンシステムは、すべての部品が既成のもので、どこでも入手可能なので、後で修繕や改造をしやすく、再利用できる資材なので、持続可能性にも配慮している。彼のコンセプトは「自分の家は自分で建てる」ことであり、住宅の使用者も参加する「協働セルフビルド」をめざしている。そのために、軽量鉄骨を用いた「開かれた構造システム」と「シンプル構法」を軸とし、資材調達も現地で行う。したがって、躯体は建築家が決定するが、それ以外の部分は住民と相談しながら調整し、仕上げや部材も地域の固有性を反映する。筆者は、本書でも触れられているヴェネツィアビエンナーレ二〇〇九と深圳建築ビエンナーレにおいて謝の展示を見たことがあった。前者では台湾館で被災地の活動を紹介し、後者ではフィンランドの建築家とのコラボレーションにより、竹を用いた巨大な繭を屋外に建設している。いずれも流行のデザインとは違う。

筆者は二〇一三年に四川大地震の被災地をまわったが、そのときに見聞できなかった内容が詳しく描かれていることが、この本の魅力だろう。すなわち、震災から五年、このエリアはほとんど復興が完了していたが、日本とまるで違う状況だった。例えば、土地の私有制度がないため、簡単に住民を強制移住させ、チャン族の大きなニュータウンがすぐに建設され、彼らが去った町の廃墟がそのまま震災遺構として保存され、テーマパークのように入場することができた。震災記念館も二つ訪れたが、いずれも震災に打ち勝ち、民族の団結をうたう政府のプロパガンダ的な施設であり、派手な復興計画が展示されていた。一方、本書の舞台となるのは、もっと田舎の小さな村落である。そこで建築家と大学教授と役人と地元の住民のあいだで、どのような人間模様が繰り広げられるのかが、生き生きと、そしてときにはユーモラスに記されているのだ（廖が中国で下痢になって、便を漏らした恥ずかしいエピソードも隠さない）。完全に現地に溶け込むことはできない、台湾の都市から来たよそ者が観察していることもポイントだろう。この本は論文をもとにしたらしいが、旅の紀行文のように読むことができる。

ともあれ、政府が公式に見せたい、一気に物事が進んでしまう大規模の復興とは、別の側面のひとつをとらえているのが本書だ。どのように街が破壊されたかの記述はほとんどない。むしろ、どのように復興住宅を建設するのかという構法を具体的に説明している。そして鉄骨の到着が遅れたり、発注したのと違う仕上げだったり、トラブル続きだ。また村の飲み会や食事、風習、葬式などの紹介は文化人類学のフィールドワークのようである。一方、ネットの接続状況を気にしたり、パソコンで映画を鑑賞し、ゲームをするほか、ビリヤードで時間を潰すなど、都会っ子らしい感覚もうかがえる。ちなみに、東日本大震災の後、日本でも大学の研究室が各地の被災地に入り、ワークショップを行なったが、避難所や仮設住宅の改善を手伝うことはできても、復興住宅の建設に直接関わるようなチャンスはなかった。そうした意味でも、住民を巻き込んだ謝英俊の挑戦は貴重だろう。

さらに本書のスタンスとして注目すべきは、謝に対する単純な礼賛や、プロジェクトの成功物語でもないことだ。例えば、現地の住民が望む家と、建築家が提示するモデル住宅のあいだに齟齬が起きていたことも報告しており、誰のための設計なのかを考えさせられる。被災地に出入りするスタッフやボランティアは、素晴らしい人ばかりではなく、欠点やクセに対する人間観察が冴えている。そして工事の賃金でもめたり、住民が支払いに応じなかったりなど、次から次へと面倒な事態が発生するのだ。しかも結局、彼らの手柄も政府に横取りされてしまう。

中国の現代建築というと、巨大都市における欧米の建築家による目立つアイコン建築ばかりという印象が強い。が、実は近年、地方において中国系の建築家によるユニークな建築のプロジェクトが増えている。その中でも謝英俊は特殊な活動を展開しており、本書は前線で何かが起きているかを日本の読者に初めて伝える大きな意義をもつ。

（いがらし・たろう　建築史　東北大学大学院教授）

「住まい」の本質をとりもどす

廖惟宇

≪ゲリラ建築　謝英俊、四川大地震の被災地で家を建てる≫

串山大訳

台湾の建築家・謝英俊は一九九九年に台湾中部で発生した九・二一大地震をきっかけに、自然災害の被災地や貧しい農村地域をわたり歩き、現地住民と協力した家づくりを手がけている。台湾八・八水害、四川雅安地震、ネパール地震の被災地での復興建築によって知られる謝の仕事は、しばしば「慈善」として評価されがちである。しかし実のところ、その目的は過度に産業化された現代の「住まい」のあり方を問い直し、産業としての建築を再定義することにある。本書は、二〇〇八年に中国四川省北部で発生した四川大地震の被災地での住宅再建に参加した台北出身の若者が、謝の実験的建築とその周辺をパノラマ的に描いた民族誌的ドキュメンタリーである。

謝英俊の建築の特徴は、現地住民が労働力を交換単価として互いの家を建てあう「協働セルフビルド」と呼ばれる手法にある。そこでの建築家の役割は、居住者が自分の家の設計・建設に参加できるような建築システムを構築することに徹底される。設計においては第一に家屋の構造的な安全性を保証し、さらに現地の生活文化や伝統を尊重してインテリア等に最大限に活かす。建設においては、専門技術を持たない人にも建てられるよう工法を簡易化し、現場で品質を監督する。こうした手法は被災直後の建築資材や労働力、資金の調達問題を解消すると同時に、人々が「住まう」ことの本質を再考する契機となる。

四川大地震被災地での住宅再建では、自力で家を建てる伝統を保つ少数民族と「協働セルフビルド」とが調和を見せる一方で、文化や政治・経済の違いに端を発する様々な困難にも直面する。その実際を率直な筆致で描き、理論と実践経験との両面から謝英俊の思想と方法に迫る。市川紘司解説。

［建築、災害・復興］【一月上旬刊】
（四六判・320頁・予価三六〇〇円）

農業革命を捉えなおす 壮大な仮説を提示

ジェームズ・C・スコット
《反穀物の人類史　国家誕生のディープヒストリー》
立木勝訳

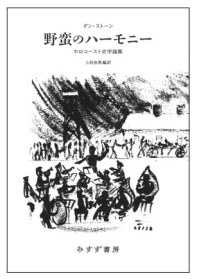
「ある感覚が要求してくる――わたしたちが定住し、穀物や家畜を育てながら、現在国家とよんでいる新奇な制度によって支配される「臣民」となった経緯を知るために、ディープ・ヒストリーを探れ、と」。ティグリス＝ユーフラテス川の流域に国家が生まれたのが、作物栽培と定住が始まってから四〇〇〇年以上もあとだったのは、なぜだろう？　著者は「ホモ・サピエンスは待ちかねたように腰を落ち着けて永住し、数十万年の移動生活を喜んで終わらせた」のではないと論じる。その過程のキーワードが、火、動植物、そして人間の〈飼い馴らし〉だ。それは、定住空間「周辺の動植物の遺伝子構造と形態を変えてしまった。植物と動物と人間が農業定住地に集まることで新しい、非常に人工的な環境が生まれ、そこにダーウィン的選択圧が働いて、新しい適応が進んだ…わたしたちもまた、狭い空間への閉じこめによって、過密状態によって、身体活動や社会組織パターンの変化によって飼い馴らされてきた」

最初期の国家で非エリート層にのしかかった負担とは？　国家形成における穀物の役割とは？　農業国家による強制の手法と、その脆弱さとは？　考古学、人類学などの最新成果をもとに壮大な仮説を提示。［歴史］【十九日刊】（四六判・296頁・三八〇〇円）

▽著者既刊『**ゾミア――脱国家の世界史**』佐藤仁監訳（六四〇〇円）

『不透明な歴史をいかに記述するか』

ダン・ストーン《野蛮のハーモニー　ホロコースト史学論集》
上村忠男編訳



冷戦終結後、東欧の旧社会主義諸国の文書保管所が続々と資料を公開したことでホロコーストの見直しが進んでいる。ナチス・ドイツのユダヤ人絶滅計画に収まらない、各国の体制や地域住民が関わる複雑な現象としての姿である。

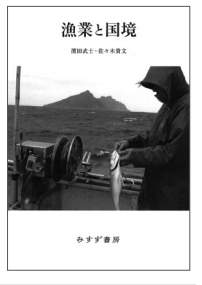
収容所で死体処理を担わされたユダヤ人ゾンダーコマンド（特別労働班）は文書を地下に埋めて隠した（「アウシュヴィッツの巻物」）。書き手の一人は、収容所内でオーケストラの演奏する音楽を聴いた時の驚きを記している、「ここではなにもかもが可能である。これは野蛮のハーモニーである」。

歴史の核心には暗くて不透明なものが残っている。それをいかに語り、記述するのか。物語理論や文化史、比較ジェノサイド論の影響等を考察、歴史の方法論と思想史の最前線に立つ論考集。［歴史・思想］（四六判・296頁・五六〇〇円）

▽関連書より　**チェア／ウィリアムズ『アウシュヴィッツの巻物　証言資料』**二階宗人訳（六四〇〇円）

海の縄張り争い、解決への糸口

濱田武士　佐々木貴文《漁業と国境》



北方水域、日本海、東シナ海――日本とロシア・中国・韓国・北朝鮮・台湾などとの国境海域と島々をめぐり、漁船の不法侵入や不法操業の軋轢が絶えない。

国は領土問題では一歩も引けないが、国際関係の維持も優先せねばならない。日本は漁業外交で不利な撤退が続き、主権の及ぶ水域でさえ、他国の漁船が許可なしに操業している。漁業人口・漁船数の減少は止まらず、外国人船員を雇用せねば立ちいかない。

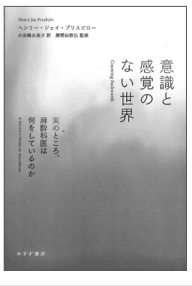
海は、かつては軍事、今日は漁業権の争いの最前線をなし、漁民は、戦前は「外地漁業」の植民地拡大、戦後は遠洋漁業で外貨獲得の尖兵となった。線を引くことも壁を立てることもできない海を舞台とする漁業は、繰り返す紛争と交渉で成り立ってきたのである。

本書は国際漁業関係史をふまえ、日本周辺水域の「海の縄張り」争いの政治・経済的な原理を明らかにする。国家間の主張の食い違いが武力衝突さえ想定させうるとき、漁業現場の知見に立って領土と漁業の問題を整理、解決への方向性を示す。［現代社会・歴史］【一月上旬刊】（四六判400頁・予三六〇〇円）

▽既刊　**濱田武士『漁業と震災』**（三〇〇〇円）**濱田・小山・早尻『福島に農林漁業をとり戻す』**（三五〇〇円）

実のところ、麻酔科医は何をしているのか

ヘンリー・ジェイ・プリスビロー
《意識と感覚のない世界》
小田嶋由美子訳　勝間田敬弘監修



二〇一二年、権威ある医学誌『ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディスン』は、その二百年の歴史において掲載した論文のなかから、もっとも重要な一本を選ぶ読者投票を行った。X線写真や抗生物質の発見など、その後のあらゆる画期的な進歩に関する論文を抑えて読者が選んだ「栄えあるベストワン」は、一八四六年に掲載されたエーテル吸入によるはじめての無痛手術についての論文であった。

今日では、麻酔は脳や心臓の手術から手足の指の手術まで、医療現場になくてはならないものになった。しかし、発見から一七〇年以上が経ったいまでも、麻酔薬が私たちの身体に作用するメカニズムは多くの謎に包まれたままなのだ。

メスで身体を切り刻まれているあいだ、痛みを感じないのはなぜなのか？　手術のあと、何事もなかったように目を覚ますことができるのはなぜなのか？　三万回以上の処置を行ってきた麻酔科医が、麻酔薬の歴史から麻酔科医の日常までを描く、謎めいた医療技術をめぐるノンフィクション。［医療読み物・ポピュラーサイエンス］【十六日刊】（四六判・232頁・二八〇〇円）

▽関連書より　**ウェスタビー『鼓動が止まるとき――1万2000回、心臓を救うことをあきらめなかった外科医』**小田嶋訳　勝間田監修（三〇〇〇円）**フランシス『人体の冒険者たち――解剖図に描ききれないからだの話』**鎌田彷月訳　原井宏明監修（三二〇〇円）

『アメリカ「戦略情報局」の重要資料』

ノイマン／マルクーゼ／キルヒハイマー　R・ラウダー二編　野口雅弘訳《フランクフルト学派のナチ・ドイツ秘密レポート》

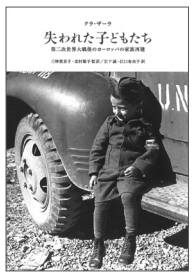
アメリカはすでに一九四二年頃から、ナチス・ドイツの敗北を想定し、戦後処理のための情報を収集していた。しかも書き手は、ドイツから亡命してきたフランクフルト学派の名だたる知識人、ノイマン、マルクーゼ、キルヒハイマーたちであった。

第二次世界大戦中にアメリカの「戦略情報局」（OSS、CIAの前身）の調査・分析部、中欧セクションで書かれた秘密文書をここに公刊。第一部「敵の分析」、第二部「崩壊のパターン」、第三部「政治的オポジション」、第四部「非ナチ化と〔占領〕軍事政府」、第五部「新しいヨーロッパのなかの新しいドイツ」、第六部「ニュルンベルクへ」、第七部「新たな敵」の構成、三一編のドキュメントから日本語版として一五編を収録。冷戦構造も見据えたアメリカの戦後世界構想はどのようなものであったか、ノイマンたちはどのような思いで何を書いていたのか。歴史的資料として貴重であるのは言うまでもなく、日本の占領政策にも大きな影響を及ぼしたアメリカの「戦略情報局」の実態をはじめて明かす。

［現代史・思想史］【十六日刊】（A5判・456頁・六五〇〇円）

「心理学的マーシャルプラン」

タラ・ザーラ《失われた子どもたち　第二次世界大戦後のヨーロッパの家族再建》
三時眞貴子・北村陽子監訳



第二次世界大戦は多数の子どもたちを餓えさせ、追放し、彼らを孤児や難民にした。さらに、実際に彼らの命を奪い、あるいは彼らの存在を抹消した。本書は、これらの「失われた子どもたち」を救い出し、保護しようと展開された国際的な子どもの救済活動に焦点を当て、この救済活動が国民と家族の再建を目指すものであったこと、さらにこの救済活動を通じて、国民と家族の再建こそが戦後ヨーロッパ再建計画の中核に据えられていく歴史的経緯を描きだす。

さまざまな人道組織や救済活動を受け止めることを強いられた「失われた子どもたち」やその家族を取り巻く地域社会の実態はどのようなものであったのか。国民主義、難民、人道主義、ジェンダー、家族、子ども、移民、階級という主題を縦横に扱い、過去・現在・未来を見据えた書である。

［西洋史・ホロコースト・教育］【十九日刊】（四六判・488頁・六〇〇〇円）

▽関連書より　**ジャット『ヨーロッパ戦後史』**［全2巻］森本醇・浅沼澄訳（各六四〇〇円）**丸山直起『ホロコーストとアメリカ――ユダヤ人組織の支援活動と政府の難民政策』**（四六〇〇円）

みすず書房新刊

（2019・8～11）

東京・文京・本郷2
TEL03(5842)5923
（価格は税別です）

恐竜の世界史
負け犬が覇者となり、絶滅するまで
ブルサッテ　最新の研究に基づく恐竜史を一望する。［恐竜本の決定版］（小林快次　北大教授。）［好評重版］**黒川耕大訳　三五〇〇円**

きのこのなぐさめ
ロン　最愛の夫をなくした悲しみを癒してくれたのは、きのこだった。森の散策、レシピ…きのこの魅力満載。**枇谷・中村訳　三四〇〇円**

現実のユートピア
フランコ・バザーリア著作集
患者にとって自由とは何か？　イタリア精神病院廃絶の中心的人物となった医師の思想。**F・O・バザーリア編　梶原徹訳　七二〇〇円**

真実なる女性
クララ・シューマン
原田光子　ピアノと共に生きロマン派の時代を織りなして一夫シューマンやブラームスとの書簡や日記を編んだ名著評伝。**五二〇〇円**

エクソダス　移民は世界をどう変えつつあるか
コリアー　『最底辺の10億人』の著者が、移民自身、受入国住民、送出国住民の三者にバランスよく目配りし分析。**松本裕訳　三八〇〇円**

自然は導く　人と世界の関係を変えるナチュラル・ナビゲーション
ギャティ　世界中をスマホに頼らず自然を感じながら歩くナチュラル・ナビゲーション。パイオニアが語る。**岩崎晋也訳　三六〇〇円**

マツタケ　不確定な時代を生きる術
アナ・チン　人間と人間以外のものの関係性、種間の絡まりあいを描き、数々の賞に輝いた、鮮やかな人類学研究。**赤嶺淳訳　四五〇〇円**

アリストテレス生物学の創造［全2巻］
ルロワ　蘇る、アリストテレス生物学の構想。二四世紀先んじていた天才的洞察を現代の発生学者が読み解く。**森夏樹訳　各三八〇〇円**

フロイディアン・ステップ
分析家の誕生
十川幸司　いまフロイトの何が重要で、臨床とどのように接続するのか。その思想の核心を明かす、フロイト論の決定版。**三二〇〇円**

身体の植民地化
19世紀インドの国家医療と流行病
アーノルド　英国植民地下インドの疫病対策と医療を主題に帝国支配が人々の身体にまで及んだことを実証。**見市雅俊訳　七六〇〇円**

霧中の読書
荒川洋治　「いい本にはいつも新しい世界がある。あとからわかる、不思議なこともある。」充実のエッセイ四十六編。**二七〇〇円**

みんなにお金を配ったら
ローリー　「ベーシックインカムの最良の研究だ」L・サマーズ。シリコンバレーからケニアまで最先端を報告。**上原裕美子訳　三〇〇〇円**

なぜなら それは言葉にできるから
エムケ　暴力をうけた人はなぜそれを語れなくなるのか。世界への信頼を取り戻すためにできることを探る。**浅井晶子訳　三六〇〇円**

中国くいしんぼう辞典
崔岱遠　土地ごとに風土も習俗もさまざまな中国でくいしんぼうたちの胃袋を捉えた垂涎必至の絶品エッセイ！**川浩一訳　三〇〇〇円**

74歳の日記
サートン　脳梗塞を患い、「健康な人にはわからないことがある」と発見する。人生の探検者が元気になるまで。**幾島幸子訳　三二〇〇円**

分析心理学セミナー
1925年、チューリッヒ
ユング　ユングが生き生きと語るフロイト、赤の書。ユング心理学誕生のドキュメンタリ。**シャムダサーニ他編　横山監訳　三六〇〇円**

ミシェル・レリスの肖像　マッソン・ジャコメッティ・ピカソ・ベイコンそしてテュシャンさえも
千葉文夫　『ゲームの規則』の作家が画家たちと結んだ鏡像の反射。絵画と文学の危険な関係を明かすエレガントな研究。**五五〇〇円**

人種と歴史／人種と文化
レヴィ＝ストロース　自民族中心主義の幻想性を突き、文化の多様性を断固擁護。名著新訳新版。**渡辺公三・三保元他訳　三六〇〇円**

自己責任の時代
その先に構想する、支えあう福祉国家
モンク　自己責任論も善意の責任否定論も、どちらもおかしい。皮相な論争を終わらせ福祉国家の現実へ。**那須・栗村訳　三六〇〇円**

ヴェイユの言葉　［新装版］
ヴェイユ　自己と他者、神と必然、悪・不幸・十字架、力と社会、正義と芸術――断章と詩を五つの相で編む。**冨原眞弓編訳　三二〇〇円**

宗教社会学論選　［新装版］
ヴェーバー　宗教意識と資本主義の関係を論じる『宗教社会学論集』から、問題設定を扱う三論文を精選。**大塚・生松訳　三二〇〇円**

量子論　［新装版］
ボーム　古典論との関係を説明しつつ、量子論を物理的に定式化する。コペンハーゲン解釈による教科書。**高林武彦他訳　七六〇〇円**

日本人の協働者が編んだ、特別な本

≪構築の人、ジャン・プルーヴェ≫

早間玲子編訳

「僕にとって、建築に対する極めて重要な本来の配慮は、謙虚さであり、正直な建設であり、そして良識である。（…）美しいものは姿形ではなく、それを構成する組織からの発露であると僕は見なしている。人々は過去の建築の前でピタリと立ち止まり、心を揺さぶられる。それは古い建築の正直な姿に、心からの感動を覚えるからだ。正直な姿、それは、まさに至高の技術であると思う」（本書より）

時を経るほどに真価をます建築・家具を設計したフランスの建築家、ジャン・プルーヴェ（一九〇一―八四）。日本ではスタンダード・チェア、デスク・コンパ、プレファブ工法の家、カーテン・ウォールの考案者として知られるが、その創造物を物語る多難な人生については、あまり知られていない。ナンシー派の著名な画家を父に生まれ、鋳鉄職人から物づくりに取り組み、ル・コルビュジエに技術的支援を乞われ、晩年はポンピドゥー文化センターの世界的コンペの審査員長を務めたが、生涯、公認の「建築家」の資格を得なかった。それでも彼は、今なお語り継がれる、唯一無二の「構築家」である。

国立工芸院CNAMで学生たちと話すジャン・プルーヴェ　1971年頃

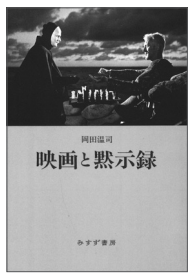
本書は、フランス現代建築の良心として、歴史的な存在であるジャン・プルーヴェの人、理論、実践を、アトリエの協働者として直に教えをうけたパリの建築家・早間玲子が紹介する、特別な本である。編者による詳細な年譜付。

［建築］【二月中旬刊】（B5変型判・336頁・予八五〇〇円）

SF、ホラー、パニック約250作を分析

岡田温司《映画と黙示録》

「もしもこの世界に終わりがあるとしたら、それはいつごろどんな風にやってくるのだろうか。それを克明かつ想像力豊かに記したのが、紀元後一世紀の末に書かれたとされる『ヨハネの黙示録』である。西洋においてこの本は、今日に至るまで、宗教はもとより、思想や芸術のみならず、政治や社会全般にいたるまで計り知れない影響力をもってきた。わたしはこのテーマについて小著を捧げたことがあるが、今回はもっぱら映画というメディウムに焦点を当ててみることにしたい。映画にとって、黙示録の世界は、汲みつくしえない想像力の源となってきたからである」。SF、ホラー、パニックなど約250作を取り上げ、原典と表象の関係を縦横無尽に分析する、映画狂の西洋美術・思想史家の面目躍如たる快作。［映画・芸術・思想］【十九日刊】



（四六判・336頁・四〇〇〇円）▽著者既刊『**映画とキリスト**』

真骨頂をしめす傑作音楽小説

トーマス・ベルンハルト《破滅者》

岩下眞好訳

晩年の代表作『消去』の数年前に書かれて話題を呼んだ二作、『ヴィトゲンシュタインの甥』と『破滅者』を一冊にして新たに刊行する。

『甥』は、ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインをおじにもち、ルートヴィヒともども数奇な生涯を生きたヴィトゲンシュタイン家最後の人で、無類の音楽通として知られた人物の姿を描いたもの。『破滅者』はグレン・グールドおよび、グールドが「破滅者」と呼んだヴェルトハイマーを主人公に、〈ゴルトベルク変奏曲〉を全体に通底させながら展開する作品である。

いずれも、実名の音楽家を織り交ぜながら著者の回想の形式で進行する、ベルンハルトの真骨頂をしめす傑作小説である。［海外文学・音楽］（四六判・392頁・五五〇〇円）▽著者既刊『**消去**』（五五〇〇円）『**私のもらった文学賞**』（三二〇〇円）ともに池田信雄訳

月刊雑誌《みすず》最近号より

郷原佳以「「白い神話」という神話――「摩滅」の形而上学1」／松本俊彦「失われた時間を求めて」／繁内理恵「船場のぼんぼんの初恋と戦争」／武田尚子「有名ライセンスブランドの人気」／五十嵐太郎「皇居に美術館を建てる」（十月号）。浅井晶子「声に耳を澄ませた翻訳家」／酒井啓子「政治学と地域研究」／土屋健「攻撃と防御」／中村和恵「ほんとうの話」／矢野久美子「世界を愛するということ」（十一月号）。五十嵐太郎「オリンピックは都市を変えるのか」／小野寺拓也「「ファシスト・インターナショナル」」（十二月号）。（各三〇〇円）

「読書アンケート」特集掲載
一・二月合併号（二月一日発行）

ご注文は、切手四二〇円（誌代・送料込）をご用意いただき「2020年1・2月号希望」と明記の上みすず書房営業部「みすず」係までお送り下さい。

書評コラム

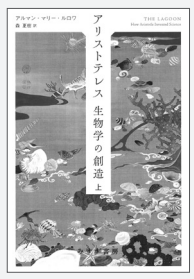
西洋の知の伝統 全体像示す

佐倉統 A・M・ルロワ《アリストテレス 生物学の創造》森夏樹訳［全2巻］を読む

ドイツで動物学の教授の自宅を訪問した際、本棚にカントやヘーゲルやキルケゴールなどの全集が揃（そろ）っていてびっくりしたことがある。日本の科学者で哲学者の全集を何セットも持っている人は、あまりいないだろう。

動物学に限らず自然科学は、西洋の知の長い伝統の末端に位置している。科学も哲学も、その同じ流れの中にある。源は古代ギリシア、中でも破格に巨大なのが、このアリストテレスである。

アリストテレスの『動物誌』は紀元前4世紀にまとめられた。動物の分類、生理、繁殖、形態、構造、生態などを網羅的に記述した百科全書的博物誌である。岩波文庫から日本語訳が出ているが、まあ、はっきり言って、相当読みにくい。現在の生物学とは、現象の見方や枠組みが大きく異なるからだ。ぼくたちにとっては間違った情報や聞き慣れない用語がたくさん出てくる。簡単には読み進められない。藪（やぶ）の中を視界ゼロで進んでいくような感じだ。



その藪を切り払い、見通しと全体像を示してくれるのが、この本だ。著者のルロワはバリバリの現役生物学者だが、視野と守備範囲がとても広い。専門化と細分化が進む現在の科学界では希有の存在である。

その彼が、文献研究と現地での丹念な調査を長年積み重ね、アリストテレスの生物学に関するドキュメンタリーテレビ番組の制作も経験し、それらを踏まえて満を持して世に出した書だ。

アリストテレスの研究方法は、現在の生物学者がおこなっている科学的手続きと、相違はあるものの、根本の発想において共通すると彼は言う。すなわち、現象を因果関係の連鎖として理解すること。生命現象を説明するのに超越者（＝神）や霊魂は必要ないこと（アリストテレスの「霊魂」は今で言うシステムや情報に相当するものだというのが著者の主張）。そして、実際のデータにもとづいて複雑な現象を記述すること。

これらは結局、科学とは何かという問題に帰着する。内容的にも分量的にもハードルは高いが、科学技術と社会と人間の関係に関心がある方には、是非とも読んでいただきたい。翻訳は秀逸、注も充実している。

（さくら・おさむ　東京大学教授）＊日本経済新聞二〇一九年十一月九日（土）掲載書評より転載▽**『アリストテレス 生物学の創造』**［全2巻］前面下に広告掲載

ノーベル賞作家による読書指南

J・M・クッツェー《続・世界文学論集》

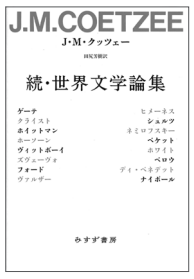
田尻芳樹訳

クッツェーはこれまで『マイケル・K』『恥辱』などの作品で、北と南、男と女、人間と動物、自己と他者をめぐるモラルの物語を紡いできたが、すぐれた書き手はまた、現代最高の読み手でもある。

『世界文学論集』につづく本書には、近年アルゼンチンの出版社から刊行したスペイン語版「個人ライブラリー」への序文も含まれている。すなわちフォード・マドックス・フォード『かくも悲しい話を……』、パトリック・ホワイト『球形のマンダラ』、ヴァルザー『助手』、クライスト『O侯爵夫人／ミヒャエル・コールハース』、ホーソーン『緋文字』である。どのエッセイにも、簡潔な筆致で対象のエッセンスを浮かび上がらせる巨匠の芸が見られる。

さらにゲーテの小説、ホイットマンの詩を語り、シュルツやネミロフスキーなどユダヤ系作家の作品を論じ、ソール・ベロウやナイポールの長編小説を読み込んでいる。クッツェーの批評的センスは衰えを知らない。またとない読書の指南となるだろう。

［海外文学・文学批評］（四六判・264頁・五〇〇〇円）▽好評既刊『**世界文学論集**』田尻芳樹訳（五五〇〇円）



各紙誌書評にとりあげられました

（2019年1月–11月）

トゥーズ『ナチス　破壊の経済』［全2巻］山形浩生他訳 **各¥4800**　藤原辰史氏（読売新聞11月24日）岡崎哲二氏（日本経済新聞10月12日）

崔岱遠『中国くいしんぼう辞典』川浩二訳 **¥3000**　木村衣有子氏（サンデー毎日11月24日号）野田正彰氏（熊本日日新聞11月3日）

荒川洋治『霧中の読書』 ¥2700　宮下志朗氏（読売新聞11月17日）岡崎武志氏（サンデー毎日10月27日号）産経新聞10月6日

アナ・チン『マツタケ』赤嶺淳訳 **¥4500**　中屋敷均氏（日本経済新聞11月16日）平松洋子氏（文藝春秋11月号）

ギャティ『自然は導く』岩崎晋也訳 **¥3600**　黒沢大陸氏（朝日新聞11月9日）

ルロワ『アリストテレス　生物学の創造』［全2巻］森夏樹訳　**各¥3800**　佐倉統氏（日本経済新聞11月9日［本面に転載］）出口治明氏（朝日新聞10月19日）

ニコルズ『専門知は、もういらないのか』高里ひろ訳 **¥3400**　鈴木幸一氏（読売新聞11月3日）間宮陽介氏（朝日新聞8月31日）

ロン『きのこのなぐさめ』枇谷・中村訳 **¥3400**　新井文彦氏（週刊文春10月17日号）「門」氏（毎日新聞10月13日）飯沢耕太郎氏（日本経済新聞9月28日）

ブルサッテ『恐竜の世界史』黒川耕大訳 **¥3500**　仲野徹氏（日経ビジネス10月11日号）中村桂子氏（毎日新聞8月18日）

原田光子『真実なる女性 クララ・シューマン』 ¥5200　萩谷由喜子氏（赤旗10月6日）

ヴェイユ『工場日記』冨原眞弓訳 **¥4200**　堀江敏幸氏（毎日新聞9月15日）

サザード『ナガサキ』宇治川康江訳 **¥3800**　橋爪大三郎氏（日本経済新聞8月17日）高瀬毅氏（北海道新聞8月17日）西崎文子氏（朝日新聞8月10日）青来有一氏（西日本新聞7月20日）長崎新聞8月9日

ワート『明治維新の敗者たち』野口良平訳 **¥3800**　鈴木幸一氏（読売新聞8月18日）上毛新聞8月20日

ギンズブルグ『政治的イコノグラフィーについて』上村忠男訳 **¥4800**　出口治明氏（朝日新聞7月27日）諏訪敦氏（芸術新潮7月25日号）

ミュラー『測りすぎ』松本裕訳 **¥3000**　伊藤亜紗氏（現代ビジネス7月19日号）上田紀行氏（毎日新聞6月18日）日本経済新聞6月22日

奥山淳志『庭とエスキース』 ¥3200　木村衣有子氏（産経新聞7月14日）飯沢耕太郎氏（日本経済新聞6月15日）堀江敏幸氏（毎日新聞5月12日）

ビール『ヴィータ』桑島・水野訳 **¥5000**　藤原辰史氏（読売新聞7月14日）

チェインバーズ『心理学の7つの大罪』大塚紳一郎訳 **¥4400**　三中信宏氏（朝日新聞7月14日）

池内了『科学者は、なぜ軍事研究に手を染めてはいけないか』 ¥3400　保阪正康氏（朝日新聞7月6日）日本経済新聞7月6日、東京新聞7月6日

ゲルヴァルト『敗北者たち』小原淳訳 **¥5200**　池内紀氏（毎日新聞5月26日）藤原辰史氏（読売新聞5月5日）

ホフマン『シュテットル』小原雅俊訳 **¥5400**　沼野充義氏（毎日新聞5月12日）西崎文子氏（朝日新聞5月4日）

三浦哲哉『食べたくなる本』 ¥2700　Dain氏（スゴ本ブログ BLOGOS 5月2日）小松理虔氏（文春オンライン4月28日、週刊文春4月25日号）速水健朗氏（GQ JAPAN 4月25日号）朝日新聞4月6日

ラスキン『ヴェネツィアの石』井上義夫編訳 **¥6000**　三浦雅士氏（毎日新聞4月28日）

廉薇・辺慧・蘇向輝・曹鵬程『アントフィナンシャル』永井麻生子訳 **¥3200**　白井さゆり氏（週刊エコノミスト4月9日号）福田慎一氏（日本経済新聞3月30日）

安東量子『海を撃つ』 ¥2700　木村衣有子氏（サンデー毎日4月2日号）読書人WEB 5月9日

山内一也『ウイルスの意味論』 ¥2800　渡辺政隆氏（日本経済新聞2月2日）

岡真理『ガザに地下鉄が走る日』 ¥3200　都甲幸治氏（朝日新聞1月26日）

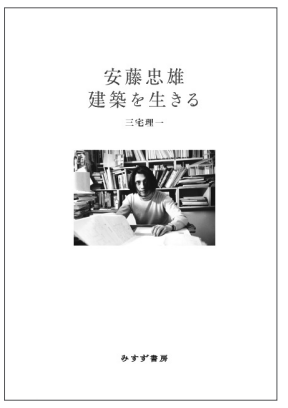
ゴドフリー＝スミス『タコの心身問題』夏目大訳 **¥3000**　諏訪敦氏（芸術新潮1月25日号）野矢茂樹氏（朝日新聞1月19日）吉川浩満氏（日本経済新聞1月12日）

髙橋樹一郎『子ども文庫の100年』 ¥3000　渡邊十絲子氏（婦人公論1月22日号）　ほか

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7
tel. 03-3814-0131 fax 03-3818-6435
みすず書房
www.msz.co.jp　ニュースレター（月2回配信中）　ウェブサイトよりお申し込みください
ツイッター www.twitter.com/misuzu_shobo　インスタグラム www.instagram.com/misuzu_shobo/（価格は税別です）

「アンドー」の全体像に迫る 本格評伝、作品論の決定版

三宅理一
《安藤忠雄 建築を生きる》



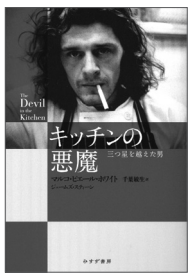
「いまや世界中に建築作品がつくられ、直島やヴェネチアなどで作品めぐりができるスケールにまで広がって、〈安藤忠雄〉なるものは世界的な出来事として理解されている。アンドー・ウォール、アンドー・キューブといった語も昨今の建築語彙として定着しつつあるようだ。日本以上に海外ではひとりの建築家の枠をこえ、ひとつの文化現象として理解されはじめている。しかし安藤忠雄をほんとうに理解するためには、その人に刷りこまれた信条や生き方、美学や土地に対する見方を十分に知らなければならない。メディアの上で生産され消費されている建築家像とは異なったレベルで安藤忠雄の実像に迫りたい。これが本書を執筆する動機であり、そのために各地をまわり、建築家本人からも詳しい話をうかがった」

生い立ちから現在までを同時代的背景とともにたどりつつ、住宅、商業・宗教施設、ミュージアムほか種々の建築と環境・文化プロジェクトを精緻に読みとく。世界の「アンドー」の全体像に迫る建築史家渾身の書き下ろし。本格評伝にして作品論の決定版。

［建築］【十二月下旬刊】（A5判・328頁・三〇〇〇円）

美食業界を刷新 フレンチシェフ自伝

マルコ・ピエール・ホワイト　J・スティーン　千葉敏生訳
《キッチンの悪魔　三つ星を越えた男》

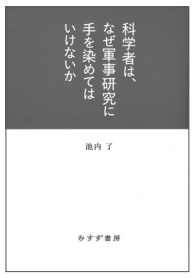


イギリス人で初めて、そして最年少でミシュラン三つ星を獲得したシェフは、料理学校や留学などを経ず頂点にのぼりつめた異色の人だった。片田舎の貧しい父子家庭で育った著者は、高校中退後、レストランを転々としながら技術をみがき、時には父親仕込みの競馬ネタを、また時には破天荒な人柄を武器にして、夢に近づいていく。ヌーヴェル・キュイジーヌなどの流行に背を向けた独自路線で評価を得て、ついに三つ星を得るまでに駆使したあらゆる知恵が、本書前半で惜しげもなく描かれる。しかし彼は、生活のすべてをキッチンに注ぎ込んでようやく得た三つ星を、わずか5年で返上してしまった――。美食界の評価主義の弊害や、ゴードン・ラムゼイらとともに盛りあげた一見華やかな業界の裏側にも触れる手記に、フルコースを再現するレシピ付。

［料理・ノンフィクション］（四六判・360頁・三〇〇〇円）

第73回 毎日出版文化賞〈特別賞〉受賞

池内了『科学者は、なぜ軍事研究に手を染めてはいけないか』



選評に、「この点だけは譲れないという著者の切実な使命感に、誰しも心を打たれるはずだ」（西垣通、毎日新聞十一月三日）。歴史考察、防衛装備庁、大学と科学者コミュニティ、AI兵器まで、普遍的かつ喫緊なテーマの全体像をはじめて記した、責任と倫理の書です。（三四〇〇円）

新装復刊［11月］

回復まで

サートン　別離と手術とスランプからゆっくりと回復していく66歳から67歳の日記。**中村輝子訳 ¥3500**

今年の受賞図書

西成彦『外地巡礼』第70回（2018年度）読売文学賞〈随筆・紀行賞〉を受賞。（四二〇〇円）

松隈洋『建築の前夜――前川國男論』2019年日本建築学会賞を受賞。（五四〇〇円）

小堀鷗一郎『死を生きた人びと』第67回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。（二四〇〇円）

英国人のふるまいのルール 続篇

ケイト・フォックス　北條文緒・香川由紀子訳
《さらに不思議なイングリッシュネス》

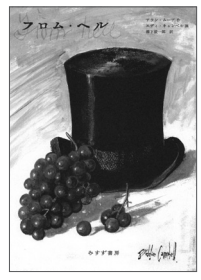
老若男女、あらゆる階級のイギリス人のふるまいを人類学の参与観察の手法で観察・分析、隠れたルールを導き出してベストセラーとなった代表作の前半を収める『イングリッシュネス』（北條・香川訳、三二〇〇円）に続く本書は、ルールがさまざまな場でどう発動されるかを徹底検証。

新居に招き、招かれたら何を言うか、言ってはいけないか。ビジネスの場で「あ、そういえば」のつぶやきを聞き流したら泣きをみる。有名人とのツーショットをどこに飾る？　葬儀の席で最適の涙の量は？ イギリス人とペット、イギリス人とセックス、イギリス人と英国国教会…「最も奇妙で、最もわけのわからないイギリス人という部族」の〈らしさ〉の決め手がここに。

［イギリス文化］【一月上旬刊】（四六判236頁・予三六〇〇円）

英国社会の暗流を超高密度に描く

アラン・ムーア作　エディ・キャンベル画
《フロム・ヘル［新装合本］》



グラフィック・ノベル界の巨星アラン・ムーアによる傑作コミック。一九世紀末ロンドンを震撼させた「切り裂きジャック」の連続殺人事件をモチーフに、英国社会の暗黒のルーツともいえる光景を、コミック表現の特性を生かして超高密度に詰め込んだ。

困窮の末に路上で立ったまま眠る娼婦たち、中産階級の台頭におびえる貴族たち。狂気の犯人だけが知る事件の頂点までが、圧巻の幻視力をもって描き出される。話題沸騰の初刊行から十年、合本版が新登場！［海外コミック］（B5判・592頁・四六〇〇円）

現代詩人の父の新たな像を析出

小倉康寛
《ボードレールの自己演出　『悪の花』における女と彫刻と自意識》

象徴主義（サンボリスム）の始祖であり、あらゆる現代詩人の父とも言うべきシャルル・ボードレール（一八二一―一八六七）。彼はいかにして、恋愛をめぐる自伝的な葛藤や情欲を、あれらの崇高にして甘美な詩篇へと昇華しえたのか。詩人は女のモチーフを彫刻化することで、詩集を近代人の成長の物語として演出したのである。『悪の花』のプレオリジナル版、初版、第二版と、その異同を徹底的に読み込み、文学史と美術史の最新の知見を踏まえながら、これまで語られなかった詩人の新たな像を析出する、画期的な新研究。［文学・美術］（A5判・528頁・九五〇〇円）

図書目録2020出来

毎年この時期に作成している小社の総合図書目録ができあがりました。本年十一月までに刊行した最新刊、ロングセラー、著作集やシリーズ、オンデマンド版、最近の復刊、電子書籍、在庫僅少本まで、ただいま出庫可能な千点余をジャンル別にご紹介。本紙添付の葉書でご請求ください。

■みすず美術カレンダー2020 特集「木版画 東京八景」**ご注文はお早めに**　一部六三〇円と送料手数料を合わせた計**七二〇円**の**切手**をご同封の上、みすず書房営業部カレンダー係までお送りください。

みすず書房 営業部だより

早いもので、〈書物復権十一社の会〉による共同復刊のリクエストの募集が始まる季節となりました。来年年明けに紀伊國屋書店のホームページ内にて投票用の専用サイトが開設されますので、ぜひリクエストくださいますよう、お願いいたします。読者の皆様にご参加いただくことで成立する企画でございます。一人でも多くの方にリクエストをしていただけましたら幸いです。なお、リーフレットの送付を希望される方は、弊社営業部までご連絡ください。

今年のノーベル経済学賞を、弊社刊『**貧乏人の経済学**』（山形浩生訳、三〇〇〇円）『**貧困と闘う知**』（峯陽一他訳、二七〇〇円）の著者**アビジット・V・バナジー**氏と**エステル・デュフロ**氏のお二方が受賞されました。ぜひ店頭にて著作をご覧ください。

みすず書房 近刊のお知らせ

2-4月の刊行予定から（書名は仮です）

スミス・マルクス・ケインズ
U. ヘルマン　鈴木 直訳
暴落――金融危機は世界をどう変えたのか
［全２巻］　A. トゥーズ　月沢・江口訳
オーケストラ（仮）
Ch. メルラン　藤本優子訳
ハンセン病療養所の自治の歴史　松岡弘之
結ばれたロープ
R. フリゾン＝ロッシュ　石川美子訳
スマートマシンはこうして思考する
J. ゲリッシュ　依田光江訳
脳のネットワーク　O. スポーンズ　下野昌宣訳
文明史から見たトルコ革命
M. S. ハーニーオール　新井政美訳
連帯と敵対（仮）A. マクベティ　山内一也他訳
アウシュヴィッツ潜入記――収容者番号 4859
W. ピレツキ　杉浦茂樹訳
（www.msz.co.jp/book/new/ にもご案内）

みすず書房・最近の重版より

マツタケ――不確定な時代を生きる術
アナ・チン　赤嶺淳訳　¥4500
子どもたちの階級闘争
ブレイディみかこ　¥2400
世界はうつくしいと［詩集］
長田 弘　¥1800
貧乏人の経済学
A. V. バナジー　E. デュフロ　山形浩生訳　¥3000
貧困と闘う知――教育、医療、金融、ガバナンス
E. デュフロ　峯陽一／コザ・アリーン訳　¥2700
いかにして民主主義は失われていくのか
W. ブラウン　中井亜佐子訳　¥4200
専門知は、もういらないのか――無知礼賛と民主主義
T. ニコルズ　高里ひろ訳　¥3400
コミュニティ通訳［新装版］
水野真木子・内藤 稔　¥3500
現象学的人間学［新装版］
L. ビンスワンガー　荻野・宮本・木村訳　¥6000
ダンテ『神曲』講義［改訂普及版・新装版］
今道友信　¥14000